

東北文教大学・東北文教大学短期大学部 図 書 館 報

発行 東北文教大学・東北文教大学短期大学部附属図書館 〒990-2316 山形市片谷地515 ☎023-688-7544

目 次

- 図書館サービスを考える ～「お節介」と「親切」の間で～ 1
- 教員の本棚から 3
- 私のおすすめ本 3
- 令和2年度 図書館報告 4

図書館サービスを考える ～「お節介」と「親切」の間で～

准教授・附属図書館副館長 伊 藤 弘 昭

図書館におけるサービス、特に積極的サービスの展開について講義等で語る場合、どうしても私の頭の中では「お節介」というワードがつきまとってくる。それは長年にわたって沁みついてしまった“図書館は利用者の「主体性」を尊重する”との基本原理にとらわれているせいであろう。図書館の役割とは「利用者と資料（情報資源）との仲介」であり、利用者の要求とそれを充たす情報資源を効果的に結びつけるための具体的な活動が図書館サービスとなる。図書館は利用者へ何かを教授・指導する機関ではない（ただし、学校図書館は除く）。図書館で行われる「利用者教育」とは、利用者が自分自身で必要な情報を探索・入手するのに必要な知識・技術を希望に応じて行うものであり、あくまで利用者の主体的利用の支援が目的である。私が図書館について教え始めた頃（30年も前になるが）、この仲介的支援を「利用者と本の仲人（なこうど）のようなもの」と例えて学生に説明していたことがあった。ただし、この例えでの説明はすぐに止めてしまうことになる。学生にとってお見合いにおける「仲人」という概念がイメージしにくいとの理由もあるが、「仲人」のイメージがはたして図書館の役割を例えるのに適切かどうかを疑問視するようになったことによるものである。そこで出てくるのが「お節介」というワードである。“こちらで望んでもいない結びつきをあれやこれやと勧めてくる。”これは「仲人」に対する私の個人的体験等からの偏見にみちたイメージであり、決して一般的イメージとして語っていないことはお断りしておく。ともあれ、「お節介」と利用者の「主体性尊重」とのギャップを感じてからはこの例えは用いていない。

それでは「お節介」とは何か。わかっているようで実

は漠然と捉えていた気がするの、整理するためにちょっと調べてみた。『広辞苑』によると「余計な世話をやくこと」「他人のことに不必要に立ち入ること」とあり、他の国語辞典でも「出しゃばっていらぬ世話をやくこと」等、（当然ではあるが）似たようなニュアンスで解説している。「余計な」「不必要な」「いらぬ」との否定的なことばがポイントになるのだろう。ではここに対義語である「必要」を入れてみるとどうなるだろう。「必要な世話をやく」「他人のことに必要に応じて立ち入ること」となる。この意味をもつことばとして近いものは「親切」とでもなるのだろうか。ちなみに「親切」を辞書（『大辞泉』）でみると「相手の身になって、その人のために何かをすること」「思いやりをもって人のためにつくすこと」とある。図書館サービスは、決して図書館員個人の「親切」で提供されるものではない。つまり「好意」ではなく図書館の機能として組織的・システムの提供される点が、「親切」との決定的な違いとなる。が、「利用者の情報入手・活用のための支援」と捉えるならば「利用者の身になって、利用者のために何かをすること」となり、その意味するものは近いと言える。だからこそ「お節介」と「親切」の境界線はどこにあるかとの視点は、図書館サービスのあり方を考える際にいくつかの示唆を与えてくれるのではない。そこで問題となるのは、この境界線を客観的・絶対的なものとして設定することが困難な点である。境界線を引く基準としては「する側」「される側」の視点でみていくことができるが、そのいずれも主観的・相対的な概念でしか捉えることができない。

「される側」、図書館では利用者の立場でみると「必要」「不必要」の判断は人それぞれであり、またその状況によっ

でも相違が生じる類のものである。同じ内容でも評価が同じとは限らない。これは近年の図書館サービスの方向性、従来の資料貸出を中心としたサービス形態からの転換と関係してくる。情報環境の発展、特にWebを中心とするネットワーク環境の普及により、情報アクセスが容易になったことから個人レベルで入手できる情報量が増加したことに伴い、一方ではそのための的確な情報の選択が難しくなっている状況も生じている。これを背景に、利用者が的確に速やかに情報を選択・入手し効率的に活用できるように、図書館はレファレンスサービスの要素を強化していく必要があると考える。目的に合う情報・資料を選択する際の図書館員による個別的人的支援や、選択のための有用な情報提供支援の充実など、積極的展開が求められている。ただし積極的といっても、その度合いと方向性は十分考慮される必要がある。極端な例を挙げるとすれば、個別的人的支援を強化するとして、図書館員が閲覧中の利用者一人一人に「何をお探しでしょう」「何かお困りのことはございませんか」と積極的に声掛けをしたら、あなたはどうか感じるだろうか。巷でよく言われている「ショップでの店員の接客」への意見の傾向からも、その評価は分かれることは予測できる。決してフレンドリーな図書館というコンセプトを否定するものではないが、授業では、レファレンスサービスの基本は「利用者の質問（要望）に応える形が基本」と教えている。

では、選択のための有用な情報提供支援について考えてみる。従来の情報支援の形の定番としては、図書館で選択のためのツール、例えばテーマ（主題）別図書リストやバスファインダーを作成・提供したり、展示を工夫したりと多くの利用者が興味・関心を持ちそうな領域を想定し、図書館側で事前にピックアップして、その選択を支援するというものである。選択の支援以外にも、テーマによっては新しい領域への興味・関心を喚起するきっかけとしての機能も期待できる。その支援対象は利用者全体であり、特定の個人を想定したものではない。ただし、近年ではAI技術の進歩により、個人に特化した情報の提供もさほど特別なものではなくなっている。ネットにおけるCM形態がその典型であるが、最もわかりやすい例はオンライン書店（ショップ）の「あなたへのおすすめ本（商品）」機能だろう。購買履歴等からの推薦機能は、ネット利用者にとって

は当たり前の機能として認知されているが、同様に図書館でも貸出履歴から「おすすめリスト」機能の提供を実施しているところもある。現時点では、貸出履歴の保存・利用に同意した場合にのみ「おすすめリスト」機能が提供されているようだが、これが標準サービスとなったらどうだろう。情報保護の観点からこうはならないと思うが、私としては大きなお世話と感じてしまう。オンライン書店の場合は、本（商品）を売るための広報戦略の一環と割り切って理解できるが、特に希望もしていない、しかも個人的な情報提供が積極的サービスと言えるかどうか疑問を感じてしまう。ちなみに私は、オンライン書店のおすすめ本は意外と的を射ており、思わず購入してしまった経験が多い。しかし、何か見透かされているような感覚を抱いてしまうことは否めない。悔しさ半分でこのように感じているだけかもしれないが。情報提供型サービスも、マス（多数）からパーソナル（個）への展開の流れの中でサービスの形を考えざるを得ないことは確かだろう。

ここまで利用者サイドの「必要」「不必要」を、考えやすい事例で述べてきた。実は語りたいのはここからである。「する側」の視点での「親切」「お節介」の境界についてである。「親切」な人は「人の話をしっかりと聞き、受け入れる聞き上手」、「お節介」な人は「相手のためとしながら、自分のために行動している」との説明があった。図書館でのサービスが「他でもやっているからウチでも取り組まないと体裁が悪いから」など、新しい技術を取り入れた新しい形のサービスを先取りして実施していることで「自己満足」「褒められたいとの承認欲求」を充たすだけのものになっていないかは、自覚的でなければ意外と気が付かない。だからこそ、常に「される側」の視点を意識しておく必要がある。お節介と言われる人がそれに気付いていない例が多いことからわかるだろう。積極的サービスとは、従来の資料貸出中心から利用者の要求を充たすための取組を模索し、実施していく試みを繰り返すことで定着していくものと考ええる。これは「親切」「お節介」の境界からも言えることであり、「常に利用者の声を意識し、利用者を知る努力を怠らない」のは図書館にとって最も重要で基本でもある。このことを自覚し、これからの図書館運営にあたりたいと思う今日この頃である。

高橋 佑（人間関係学科1年）

『しゃばけ』

畠中恵 著 新潮社 2013.3 (913.6/ハタ 1F 一般書架)

皆さんは妖怪をどのようなものだと思いますか？多くの人は怖そうなイメージを持っているかもしれませんが、この『しゃばけ』シリーズには、怖いだけではなく面白い妖怪が多く登場します。

本の主人公は、江戸の廻船問屋兼薬種問屋である長崎屋の跡取り息子「一太郎」。彼は生まれつき身体が弱いこともあり、両親からは溺愛され、祖父からは妖怪を護衛につけられていました。一太郎の周りには犬神の「佐助^{あやかし}」や、白沢の「仁吉^{あやかし}」をはじめ、多くの妖が彼を慕って集まります。

この本は、そんな一太郎が妖の力を借りて、江戸で起こる奇妙な事件を解決していくという物語です。また、一太郎がなぜ妖を見ることができるのかは、物語が進むにつれて明かされていきます。

謎解きを楽しめる要素がある一方、物語自体がとても読みやすくなっています。ミステリーが好きな人も苦手な人も気軽に読める作品です。是非手に取ってみてください。



『なぜ日本は没落するか』

森嶋通夫 著 岩波書店 2010.7 (302.1/モリ 2F 一般書架)

読んで終わりではなく、誰かと内容について議論したくなる、何かじっとしていられなくなる一冊です。1998年に執筆された本書冒頭でいきなり著者は喝破します。半世紀先の2050年の日本社会は「没落する」と。経済学者として江湖に名の知られた著者らしく、難解な経済理論を軸に議論が展開されるのかと思いきやそうではありません。

著者は次のように考えます。社会の土台は人間であるから、半世紀後の日本社会における政官財界のトップを担う世代の量と質、つまりその人口と、彼らがどのような教育を受けて世の中に出ていくのかを見れば、その社会がどうであるかを推定できると。

こうした方法論を基礎とし、さらに鋭利な分析による日本人の倫理観や日本社会の政治・教育などの構造的欠陥を指摘しながら、著者は2050年の日本の「没落」を予言し、さらにはその救済案までも本書の中で示しています。その予言の妥当性やいかに？現在に生きる私たちの視点で読み解くのも面白いのではないのでしょうか。

著者が1998年の時点で別括した日本社会の構造的欠陥は、2021年のいまにおいても、その本質的なところはほとんど解決されていないように思われ、それはすなわち今日の日本に対する警鐘であると受け止めれば、私は著者の洞察眼に敬服せざるを得ません。

ところで良書というのは、読者に様々なことを考えさせます。

学生と海外旅行や留学の話になった時にしばしば感じるのですが、いまの若い世代は日本がとても大好きですね。「安全で、清潔で、親切」、そんなところに好感を持っているようです。私自身も日本のそうした一面は好きですし、できればこの先もずっとそうであって欲しいと願う一人です。

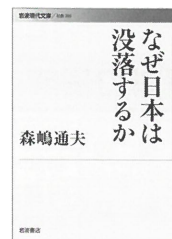
ただし、森嶋氏の方法論でいえば、私たちが好感を抱いているそうした日本をつくってきたのは、現在の社会の重鎮の世代です。簡単に言い換えれば、私たちの祖父母や父母がつくり担ってきた日本ということになります。

私は筋金入りのおばあちゃん子でした。祖母は大正生まれでしたが、一緒に散歩していると道端にポイ捨てされたゴミをさりげなく拾ってゴミ箱に捨てていたのを思い出します。また、戦中戦後の物のない時代を生き抜いたためか、本人自身は決して裕福ではありませんでしたが、社会的な弱者への募金活動などにも熱心でした。

こうした世代の善意の積み重ねによって「安全で、清潔で、親切」な日本が成り立ってきたと考えるとき、その存続を私たちが望むのであれば、私たちもこれからの日本がそうあり続けるように意識して社会と関わらねばなりません。

私が本書を最初に読んだのは、大学院に在籍していた時でしたが、それ以降、自分が社会の一構成員だということを強く自覚して生活するようになったように思います。本書は私にとって、そんな自分自身の生き方を改めて考えさせられる一冊でした。

是非、味読してみてください。



図書館学生アルバイトの「私のおすすめ本」

遠山 愛子 (子ども教育学科2年)

『続 多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ。 孤独も悪くない編』

Jam マンガ・文、名越康文 監修 サンクチュアリ出版 2020.12 (159/ジャ 2F 一般書架)

皆さんは「ひとりでいること」をどのように思いますか？寂しいと思う人も、もしかしたら孤独が怖いという人もいるかもしれません。しかし、中には安心するという人もいるのではないのでしょうか。実は私もそのひとりなのですが、今回ご紹介するのはそんな「ひとりの不思議」に迫った四コマ漫画です。

読み進めてみると思わず「あるある！」と言ってしまふような、人間関係や世の中のモヤモヤについての解決方法がいくつも収録されています。漫画の絵柄はゆるやかで可愛いですが、それぞれのお話には心を楽にしてくれるメッセージが添えられています。

コロナ禍で大変な世の中ではありますが、ひとりになることが多くなった今こそ、自分自身や周りとの人間関係を見つめ直すいい機会ではないのでしょうか。この本を読み終わる頃には、「ひとりも悪くない」と考えが変わるかもしれません。

人生の「ヒント」にぜひ、この本を手にとってみてください。



黒田 沙詠 (人間関係学科1年)

『人生はワンチャンス！「仕事」も「遊び」も楽しくなる65の方法』

水野敬也、長沼直樹 著 文響社 2012.12 (159/ミズ 2F 一般書架)

この本は、犬が好きな人や、なにか自分の支えになるような言葉を探している人におすすめです。1ページごとに様々な表情をしている犬の写真と「大切なこと」が載っています。ページの裏面には、その「大切なこと」に関わる偉人のエピソードや名言が書かれてあり、読んでいてとても楽しい本です。

65枚の写真は、＜仕事＞やく＜コミュニケーション＞などの7つのカテゴリーに分けられています。そのため、最初の＜スタート＞からでも、自分が気になるカテゴリーからでも、自由に読み始めることができます。

私が一番印象的な言葉は、「自分らしさをなくさない」というココ・シャネルの言葉です。私はこの言葉とエピソードを読んで、自分にしかない個性をなくすのはとてももったいないことだったと気づきました。それまで私はあまり自分に自信がなかったのですが、今は前より自信がもてるようになりました。

このように元気づけられる言葉がたくさん載っているので、ぜひ読んでみてください！



上記の図書は図書館で所蔵しています。ぜひご利用ください。

令和2年度 図書館報告

資料の構成

(令和3年3月31日現在)

1. 図 書	蔵書数	127,447冊
	年間受入冊数	1,370冊
2. 雑 誌	所蔵雑誌 種数	250種 (内国誌 206種, 外国誌 44種)
	年間受入雑誌 種数	132種 (内国誌 122種, 外国誌 10種)
3. その他	新聞 種数	16種 (内国誌 12種, 外国誌 4種)
	視聴覚資料 所蔵数	1,414点
	データベース	Academic Search Elite, PsycINFO, 医中誌web, MAGAZINE PLUS, 聞蔵, 河北新報データベース, 山形新聞記事データベース

利用状況

- 開館日数 245日
(参考: 令和元年度 250日)
- 入館状況
 - 月別入館状況
入館者数(延べ数) 66,345人
 - 一日平均入館者数 271人
- 館外貸出状況
 - 学科・月別館外貸出冊数
年間貸出冊数 3,367冊
(参考: 令和元年度 4,600冊
: 平成30年度 4,034冊)
 - 一人当たりの年間貸出冊数推移

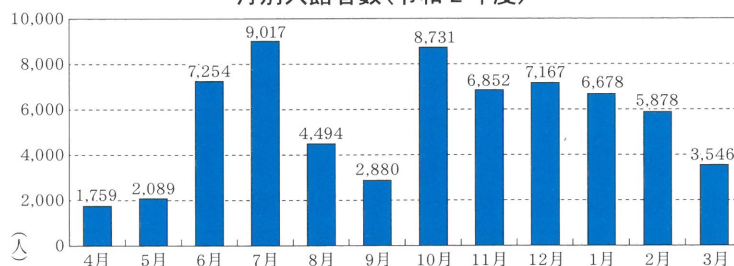
参 考

	令和2年度	令和元年度	平成30年度
子ども教育学科	4冊	5冊	5冊
総合文化学科	2冊	4冊	4冊
子ども学科	9冊	10冊	9冊
人間福祉学科	2冊	5冊	4冊
留学生別科	0冊	1冊	1冊
本学平均	5冊	6冊	6冊

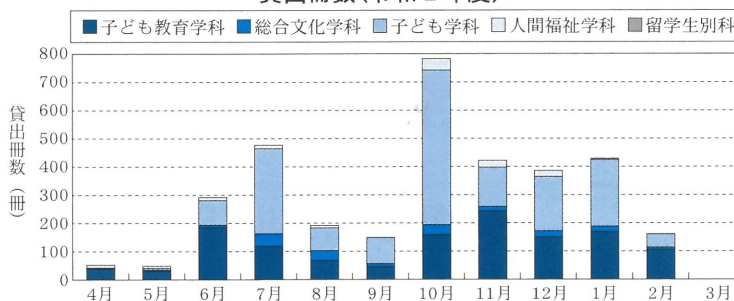
サービス提供状況

- 相互協力業務
 - 図書借受冊数 3冊
(参考: 令和元年度 6冊)
 - 図書貸出冊数 0冊
(参考: 令和元年度 1冊)
 - 複写取寄件数 47件
(参考: 令和元年度 134件)
 - 複写提供件数 1件
(参考: 令和元年度 3件)
- 学内文献複写 複写枚数 258枚
(参考: 令和元年度 613枚)
- 学内参考業務 受付件数 141件
(参考: 令和元年度 142件)
- 貸出ノートPC 貸出件数 584件
(参考: 令和元年度 431件)

月別入館者数(令和2年度)



貸出冊数(令和2年度)



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
子ども教育学科	39	30	184	118	67	45	157	241	149	168	105	0	1,303
総合文化学科	1	4	9	44	35	11	36	16	22	19	8	0	205
子ども学科	2	6	86	300	80	91	545	138	191	235	46	0	1,720
人間福祉学科	10	8	11	12	9	0	40	24	21	4	0	0	139
留学生別科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	52	48	290	474	191	147	778	419	383	426	159	0	3,367

令和2年度 新型コロナウイルス感染症対策の取り組み

- 開館状況
 - (休校期間) 2020年4月13日(月)～6月8日(月)
平日 9:00～16:00 土曜 9:00～16:00
 - (授業日) 2020年6月9日(火)～通常より1時間短縮して開館
平日 8:30～18:00 土曜 8:30～17:00
- 開館時の利用制限
 - ・AVコーナー利用休止(貸出用PCでの閲覧、ヘッドホンは個人のものを使用) ※令和3年度より解除、ヘッドホンは貸出休止
 - ・集密書架の利用休止(希望者に対しては職員が対応) ※令和3年度より解除、3名まで利用可能
 - ・個人キャレル、グループ学習エリアの座席減少 ※令和3年度より、個人キャレルは全席利用可能
- 館内の感染対策
 - ・館内の換気
 - ・入口への消毒液の設置、カウンスターの飛沫防止対策板の設置
 - ・返却された書籍、PC等の消毒
 - ・3密での利用、マスク未着用での利用時の注意
 - ・閉館後、1時間かけ、机、椅子等接触する箇所の消毒

[この取り組みは、令和3年度も継続し状況に併せて対策を行っていく。]